

# 幼稚園施設のあゆみ

——東京女子師範学校附属幼稚園の施設とその発展——

菅野 誠

## ○ はじめに

幼稚園施設は、学校施設のモデルとして、常に学校建築の最先端を歩んできた。昔も今も、幼稚園の施設計画には、関係者が智慧をしほり、情熱を傾けて設計してきた。そのような、最も新しい施設であったのかかわらず、また、いっぽうではいつも、原点に立ち返っての反省が加えられてきた。このことが、幼稚園施設の健全な発展を支えてきたことの原因であったように思われる。

お茶の水女子大学附属幼稚園の場合を例として、このような幼

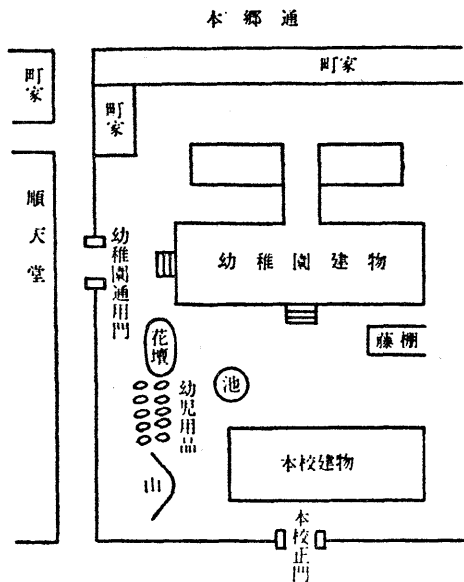
稚園施設計画の発展のあゆみをたどってみることにしよう。

### 一、東京女子師範学校附属幼稚園の施設（明治九年）

我が国、最初の幼稚園は、現在のお茶の水女子大学附属幼稚園の前身、東京女子師範学校附属幼稚園であったことはよく知られている。明治九年十一月竣工した、同幼稚園の建築は、擬洋風建築様式と呼ばれるもので、当時珍しく人々の目に写ったに違いない。この様式は、当然、幼稚園施設の最初のモデルとなつて、その後の師範学校附属幼稚園はもろろんのこと、他の一般公私立幼稚園施設の計画に影響を及ぼしたものであることは、容易に想像

される。

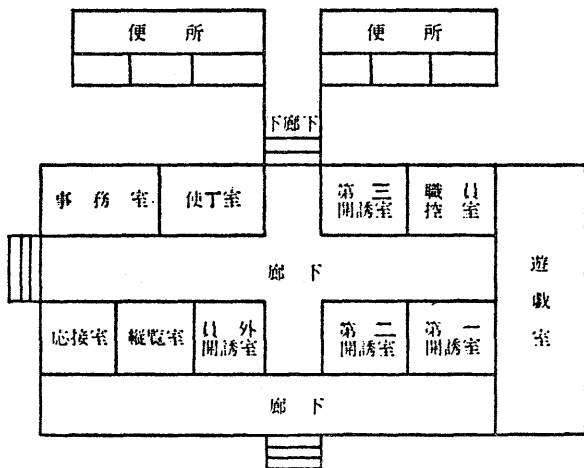
明治九年六月二日に建物の設計などの相談があったことが記録されている。はじめての幼稚園施設のことであったので、当然なこととはいえ、施設を造る技術者側と、施設を利用する教育関係者側、管理者側との話し合いがなされたことは注目すべきことである。幼稚園施設計画にあたって、事前によく話し合いがなされることが、幼稚園施設計画の発展に大いに寄与しているからであ



(a) 建物及び庭園の配置図

る。

その後、直ちに着手して、同年十一月六日に竣工した。位置は現在の東京医科歯科大学の所在する敷地内西北隅で、順天堂病院に隣接したところであった。建築面積は七二三平方メートル（二二五坪）で、建築や樹木の手入れなどに要した費用の合計は五千



(b) 建物の略平面図

▲第1図 東京女子師範学校附属幼稚園の配置図及び略平面図（明治9年建築）

円に達したという。当時としては大金であった。

その平面は第1圖に示すとおりで、主棟はほぼ東西に延びた太い一文字型、背面に便所の棟があった。西の玄関を入れて十文字に廊下を通した中廊下型式で、田の字型プランと称される代表的な擬洋風の平面である。外観上の様式も、洋風を模したもので、南側には、開放型の廊下を、吹きさらしのペランダ風に加えてあった。床は非常に高く、階段をおりて庭に出るようになっていた。床を高くしたのは、その地下中央に大暖炉を設けたためで、ここから建物全部に鉄管で熱風を送る装置がしてあった。これは、幼稚園のことだから、火災の危険のないように、しかも暖かくという進んだ考えであったが、何分にもそのころの構造、施工はじゅうぶんではなく、思うように採暖することができず、遂にストーブを用いざるをえなかったという。

園舎の主棟には、遊嬉室、開誘室、員外開誘室、縦覧室、応接室、職員室、事務室、小使室兼付添人控室および廊下が配置されており、別棟の便所まで、渡り廊下が設けられていた。遊嬉室は東端の広い室で、現在の遊戯室にあたる。開誘室は、保育室にあたり、机・椅子など、そのころの小学校風に並べ、弁当棚、三角棚などが室の一隅に置いてあったという。員外開誘室は、満三年未満の幼児の保育室で、保育が保育するのではなく、付添人と助

手二名がこの室の保育を担当した特別保育室ともいうべきものであった。縦覧室は、資料室兼貴賓室にあたり、これとは別に一般の来客のための応接室が設けてあった。南側のペランダ風の廊下と、中廊下が東端で広い遊嬉室に接していて、完全な対称型は破られていたが、平面・外景とも、ほぼ対称型であった。ペランダの欄干など、細部のデザインも、明らかに擬洋風の特徴を備えたものであった。この建物は明治十七年九月の大暴風雨で屋根が吹き飛ばされ、改築されることとなる。

庭園は広く西に延びて、そこに池や築山、藤棚、花壇などがあった。また、幼児一人あて、おのおの九〇センチメートル(三尺)角に仕切った畝があって、そこに幼児が自ら種子をまいて、野菜や草花を栽培し、自然物の観察を行うことができるようにしてあった。その作業のため、幼児用の小形のくわや手桶、ひしゃくなどが、用意してあった。続いて広い芝生があり、芝生に幼児が嬉々として遊びたわむれるさまは、さながら楽園のようであったという。

## 二、「幼稚園創立法」の施設（明治十一年）

東京女子師範学校附属幼稚園の監事関信三は、幼稚園の創立に

関しての基本的な考えかたをまとめ、『幼稚園創立法』を著わした。これを、明治九年竣工の附属幼稚園施設と対比して読むと興味がある。同施設の解説として読むことができるからである。また、当事の幼稚園施設計画の基本的考えかたを示すものとして重要である。

この「幼稚園創立法」には二種類がある。一つは明治十一年四月、文部大輔田中不二麿に呈進したもので、他の一つは、同年十二月、『文部省教育雑誌』第八十四号に、同じ標題で発表した論文である。この両者の間には若干の差異がある。前者には所要経費などが記されているが、後者にはない。所要諸室は前者のほかに、後者はきりつめた、最小限度のものとなっている。かわりに建築的諸注意は、後者のほうが詳しい。収容幼児数は、前者が三六人であるのに対し、後者は四八人である。思うに、東京女子師範学校附属幼稚園の設立に関して苦心したところを、他の師範学校附属幼稚園設置の場合の要望として前者に記し、一般の幼稚園設立の場合の注意としての基準を後者に述べたものである。すなわち、前者は標準的基準を示したものであり、後者は幼稚園設置の最低基準を記したものと考えられる。

この二つの幼稚園創立法の「屋宇ノ結構」と「園庭ノ景況」の二節に、それぞれ園舎と園庭の計画上の諸注意が述べてある。以

下後者の創立法の場合について、その概要を記してみよう。

第一の「屋宇ノ結構」では、幼稚園を創立しようとする場合は、幼児の通園距離を考慮すること、位置は乾燥した土地に選ぶべきこと、園舎は東南に面するがよいことなどを述べ、必要な諸室として、遊嬉室、開誘室、縦覧室の三室を挙げている。遊嬉室は園舎の東端に設け、広い面積をとって、音楽、跳舞、遊戯及び体操に使用するため床板を平らにすること、室の形は南北に長い長方形がよく、北側は保母や幼児用の椅子を置いたり、楽器を備える場所とし、南側は広く開けて遊戯などを行わせるようにし、西側に出入口を設けるがよい。開誘室は二十恩物などで幼児を開誘する場所であるが、幼児は元来性質や年齢が違うから、これを一室で行なわないで、甲乙二室に区分して、優等開誘場と劣等開誘場とし、その二室の間には板壁又は大きな扉で仕切り、開閉自由とするがよい。床は敷物を敷いて、室の形は東西に長い矩形とし、保母の位置は甲室では東側、乙室では西側に設け、南側の壁には各二個の大きな窓を設けて明るくし、出入口はいずれも保母側に設けるがよい。縦覧室は、各種の玩具、花、籠かごに入った鳥などを陳列したり、幼児に適当な図書、掛図などを掲示して置く室で、その形状は博物館の陳列場のようにするがよい。以上の三室を設けて、なお余力のあるときは保母詰所を設けるが、前記の三

室があれば、幼稚園としてよいと記している。

第二の「園庭ノ景況」では、幼稚園に園庭を附設するのは、飾りではなくて、欠くことのできないものであるとして、フレイベールの園庭観を紹介し、一定の決まりはないが、少しでも広いほうがよいとして、その試案を述べている。すなわち、園庭を公私の二庭に区分し、公庭は園舎の表側にあるのがよく、全体の六〇%以上を充てる。そこには山、谷、田園、池、沼、島などを築造して、その間に竹、木、草花など四季の植物を栽培する。私庭は全体の四〇%以下の地面を充て、園舎の裏側に設け、三・三平方メートル（一坪）若しくはその半分の面積に区画して各幼児に与え、各幼児が随意に草木の種を蒔いて、土をすぎ、水を注いで自ら栽培させる。また、私庭のうち、園舎の東の部分に若干の空地をとって、晴れた日には、幼児全員がここに出て、体操や遊戯をすることができるようにするがよい。なお、園庭の中に井泉や、池沼を設けたり、地域によっては、園外の河水や海潮を引くことができれば最もよいが、幼児に事故がないよう、くれぐれも注意しなければならぬ、としている。

### 三、東京女子師範学校附属幼稚園の

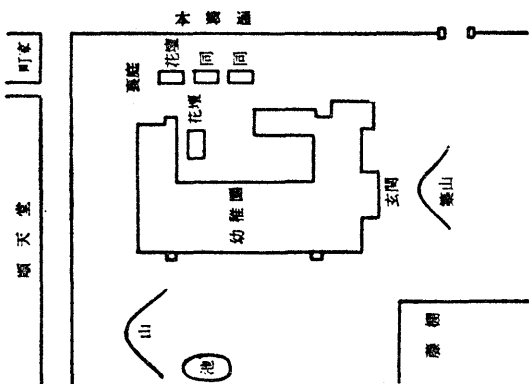
災害復旧（明治十九年）

明治十七年九月、東京地方に大暴風雨が降り、東京女子師範学校附属幼稚園の園舎と園庭は大被害を受けた。屋根は吹き飛ばされ、創立当時の建物は使用に堪えないまでに破損してしまった。やむをえず、幼稚園は本校の食堂を半分に仕切り、しばらくの間、ここに移って保育を行なった。明治十九年三月に、災害復旧の新園舎ができ上がって、四月に移転した。その建物の平面は第2圖に示すとおりで、東側が玄関入口になっていて、玄関より北に職員室、小保育室、小使室があり、便所が別棟となっていた。主棟南側に保育室が四室あり、西棟に遊戯室、参考品室があった。園舎ブロックはコの字型、廊下は内側配置のH字状の片側廊下となっていた。保育室部分が北側片廊下となったことが注目される。

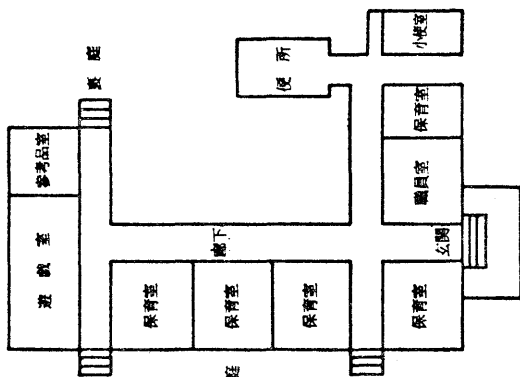
この型式は、中廊下型の擬洋風型すなわち洋風模倣型と、外まわりに廊下を設けた従来の和風型の折衷型式として、昭和戦前期に至るまで推奨された型式に属する。西向きの室を遊戯室と参考品室としたのは、保育室に西日があたるのを避けた結果と思われる。ともあれ、使用上の経験から、擬洋風の欠点と、和風の欠点を改良し、折衷試作型式にまで発展する平面の初期の一例として注目されるものである。

#### 四、岡山県師範学校附属幼稚科の施設 (明治二十二年)

最初の東京女子師範学校附属幼稚園施設の流れをくむ幼稚園舎の一例として、この場合を調べてみよう。



(a) 幼稚園配置図

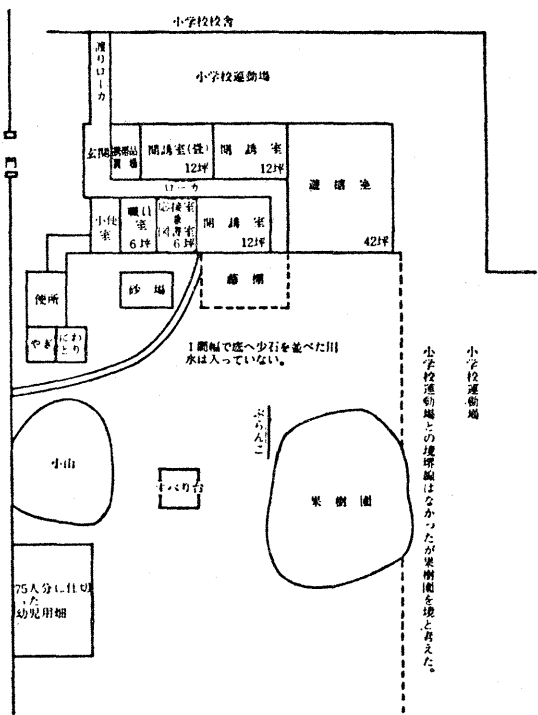


(b) 建物略平面図

▲第2図 明治19年3月再築の東京女子師範学校附属幼稚園の配置図及び略平面図

明治二十二年九月、岡山県師範学校附属幼稚科が、独立の園舎を新築した。その建築面積は三八六平方メートル(二一七坪)で費用は一、二八〇円の西洋式建築、独立園舎であったという。この園舎は大正十一年老朽となって取りこわされてしまっているが、詳細を調べることができないが、関係者の記憶による平面は第3図のとおりであったという。中廊下型で擬洋風の流れの平面であることは明らかである。

東京女子師範学校を明治十二年に卒業した榎本常(のりもともつね)に招いて設立経営に当たらせているので、当然、東京女子師範学校附属幼稚園の設計の影響があったことが想像され、間取りなど、近似している点が多く見られる。このように、東京女子師範学校の卒業生が、全国各地で活躍するようになると、その附属幼稚園のイメージを持って、各地の



▲第3図 岡山県師範学校附属幼稚科の略配置平面図  
 (明治22年9月落成のもので、岡、服部、佐藤三氏の記憶による大正3年頃の様子)

幼稚園の間取りや形態にも影響を及ぼしてゆく。  
 小学校施設に隣接していた関係で、自由な敷地が得られなかったためとも思われるが、南西隅に便所が別棟として建てられている。西側から門を入れて玄関があり、南側に小使室、職員室、応接室と開誘室があり、中廊下をはさんで北側に携帯品置場と開誘

奈良女子高等師範学校が創設されるに及んで、東京女子高等師範学校と名称変更がなされた。そのつど、附属幼稚園に冠する学校名の変更がなされたが、施設は明治十九年の施設をほぼそのまま使用していた。  
 ところが大正十二年九月一日、突如、関東大震災が起こり、こ

五、東京女子高等師範学校附属  
 幼稚園の震災復旧(昭和六年)  
 明治七年創設された東京女子師範学校は明治二十三年女子高等師範学校となり、明治四十一年、

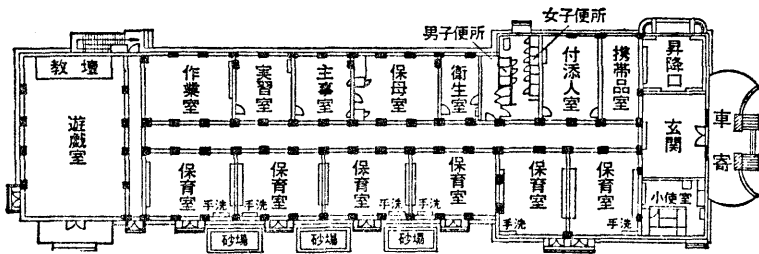
室が二つあった。玄関に近いほうの開誘室は畳敷きであったとのことで、東京の女子師範学校附属幼稚園の「員外開誘室」にあたるものと推測される。  
 中廊下の突きあたり、東側に遊戯室がある。東京の場合にみられたペランダ風の南廊下が設けられていないことと、十字型中廊下がZ字型に変わっている相違点がみられるが、その他は東京女子師範学校附属幼稚園の平面をそっくりで、これを模して計画されたものであることは明らかである。

のとき園舎は母校と共に全焼してしまった。復旧についていろいろ議論があったが、現在地の大家窪町に母校もろとも移転復旧することとなった。幼稚園の特殊性から平家建としてであったが、防災の見地から特に鉄筋コンクリート造とすることが認められた。文部大臣官房建築課の設計で、主として西村勝技師の設計によるものであった。

園舎は昭和六年六月着工して、昭和七年十二月に竣工した。そして同年同月下旬本郷湯島から引移り、翌八年一月から保育を始めた。これが現在のお茶の水女子大学附属幼稚園の園舎である。その平面は第4図のとおりで、太い一文字型、中廊下で、ふしぎなことに、明治九年の最初の平面(第1図)と実によく似ている。玄関のところで、西と東をさかさに、ちょうど図面を裏返しにしたもののように見える。東の車寄せを入れて玄関があり、北が昇降口で南が小使室である。中廊下が突き当たりの遊戯室までまっすぐに通っている。南側には六つの保育室がならび、中廊をへだてて北側に携帯品、付添人室、便所、衛生室、保母室、主事室、実習室、作業室がある。南側の砂場、遊園には各保育室から直接に出られるようになっており、よくまとまったプランである。

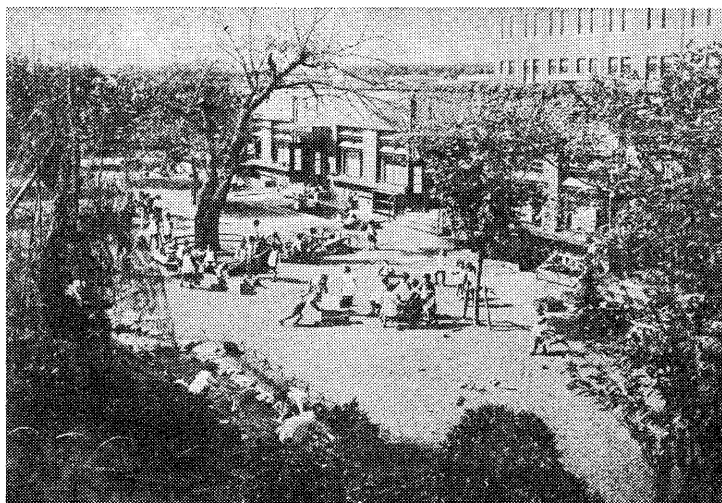
保育室の出入口上部などには、きれいなステンド・グラスがはめこんである。屋根はフラット・ルーフで、外壁は黄褐色のスク

ラッチ・タイル貼り、保育室外側にはコンクリート舗装部分が広くとつてある。前庭には芝生の遊び場が設けられ、樹木が豊富に植えられている。敷地総面積三、三三五平方メートル(一、〇二一坪)、園舎面積一、二六一平方メートル(三八二坪)、庭面積二、〇七四平方メートル(六二八・五坪)であった。時代の進歩にともなつて、ディテールについては漸次改良が加えられてはきているものの、構造が木造から鉄筋コンクリート造に変



▲第4図 東京女子高等師範学校附属幼稚園  
(鉄筋コンクリート造) 略平面図 (昭和7年建築)





▲第5図 竣工当時の東京女子高等師範学校附属幼稚園の園舎と園庭

わっても、よく考えられた平面計画は、あまり変化しないこと、また、それぞれの幼稚園には施設についても歴史と伝統があり、たいせつにされてきたことは、注目すべきことと思うのである。

(教育施設研究所)

《参考文献》

- 1 倉橋惣三、新庄よし子、日本幼稚園史、フレールベル館、昭和三十一年四月
- 2 岡山県保育史編集委員会編、岡山県保育史、フレールベル館、昭和三十一年二月
- 3 岡山大学教育学部附属幼稚園、附属幼稚園八〇年のあゆみ、昭和三十一年二月
- 4 東京女子高等師範学校、東京女子高等師範学校六十年史、昭和三十一年一月
- 5 東京女子高等師範学校、東京女子高等師範学校落成記念写真帖、昭和三十一年一月
- 6 全国幼稚園施設協議会編、幼稚園の施設設備の活用5、園舎の歴史と海外の園舎、フレールベル館、昭和四十六年一月
- 7 文部省、幼稚園教育百年史、ひかりのくに株式会社、昭和五十四年八月